

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	はじめに
Author(s)	山根, 由美恵
Citation	近代文学試論 , 56 : 35 - 36
Issue Date	2018-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/49049
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049049
Right	
Relation	



《小特集》「村上春樹「騎士団長殺し」―〈メタ・テキスト性〉と「物語」のその先―」

はじめに

山根 由美恵

本小特集は、平成二十九年十一月二十六日に立教大学で行われた、日本近代文学会十一月例会「第三回 国際研究集会」におけるパネル発表「村上春樹「騎士団長殺し」―〈メタ・テキスト性〉と「物語」のその先―」（代表者 山根由美恵）を元にしたものである。パネル発表の要旨・前半部を以下に抜粋する。

(<http://amljs.web.fc2.com/PDF2017/2017kokusaiyoushi.pdf>)

*

村上春樹文学は現在翻訳言語が五十以上となり、その国際性が際立っているのは周知の事実である。この事態と連動して、村上文学研究はグローバルな規模で活発に進められている。ただ、膨大な研究成果は現在一元化して把握できる段階になく、それぞれの国における優れた研究活動が積極的に「交流」することは未だ困難である。また、日本国内に目を向けると、研究センターなどの基盤整備が進まなかった点、学会という場でのパネル発表はあまり行われてこなかった点など、世界への発信が弱い状況となっている。

本パネルでは二〇一七年二月刊行、村上春樹「騎士団長殺し」を取り上げる。既に書評などでも指摘されているが、「騎士団長殺し」はこれまでの村上文学の要素が多くちりばめられており、村上が自身の

物語をメタレベルから捉えたことによって生まれた〈メタ村上春樹テクスト〉と言える。一九八〇年代以来一貫して「物語」の重要性を表明してきた村上は、三十数年を経てテクスト自体がその仕組みについて自己言及的な〈メタ・テクスト〉に辿り着いた。これは、激変する世界情勢の中で、現代における「物語」として相応しい強度を持つものなのだろうか。

日本・台湾・ハンガリーと国は分かれているが、本パネルメンバーはこれまで「物語」を重要なキーワードとして村上文学を論じてきた。村上文学の「物語」性は、国という枠を越え積極的な研究「交流」をする上でも、有効な概念であると言えよう。今回、本作の〈メタ・テクスト〉性に正面からぶつかり、村上文学の可能性と限界、および現代における「物語」性について発表を行う。それは世界的に注目されている本作を国際研究集会という場でいち早く世界へ発信するという意義も持つ。

*

パネラーは四名であり、本小特集においてもパネル発表順に掲載した。パネル後に発表された研究を反映させたり、時間の関係で発表に組み込めなかった部分を深化させるといった形で、全ての論考がパネ

ル発表の成果を深めたものとなっている。また、当日はディスカッションであった跡上史郎氏も自らの論考を寄稿した。以下、各論者たちの論考と小特集の流れについて、簡単に記す。

台湾・淡江大學村上春樹研究センターの内田康氏はこれまで村上文学を、「王Ⅱ父殺し」の「物語」という側面から分析してきており、本作では「父」という存在と「薔薇の騎士」に考察の基点を置く。「騎士団長殺し」は「父」を継承していくこと」の可能性と不可能性に関して問題提起したテキストであり、そこには試行の深まりがあると論じている。

ハンガリー人研究者であるダルミ・カタリン氏は、テキストを一九二〇～三〇年代のヨーロッパ絵画や芸術に見出される「マジックシャーレアリスムス／魔術的リアリズム」との関係で分析する。また、テキストは現在のヨーロッパ人を意識して書かれた物語であると指摘し、テキストにおけるヨーロッパの二面性について考察する。

山根は、メタ化の試みと家族という「連帯」の結末に対する違和感を、物語の構成や「メタ・テキスト」の本義である「批判的再創造」の点から考察する。また、結末部に描かれた三・一一の扱いについて、他の「震災後文学」と比較し、「騎士団長殺し」は「震災後文学」たり得ていないと述べる。

物語構造論（話型論）を展開してきた平野芳信氏は、村上は本質的に「短篇小説作家」であると捉え、短篇と長篇さらにはその中間の形態としての連作短篇集という「物語」の試行錯誤の末に「騎士団長殺し」は生まれたと分析する。そして、本作は村上のこれまでにない達成であると積極的な評価を行う。

跡上史郎氏は、「二世の縁」、ギリシア神話におけるオルペウスの挿話といったブレテキスト、また「紋中紋」のような構造的観点から分析を行い、「諸君」の対象を読者にまで広げ、村上がメタフィクションという方法で、作中画『騎士団長殺し』を観る作中人物と小説『騎士団長殺し』を読む現実の読者を繋いでいることを論証しようとする。

「騎士団長殺し」は「メタ村上春樹テキスト」としての新局面を示唆していると考えられるが、従来村上が書いてきた「物語」との関係性、現代における有効性において謎の多いテキストである。本小特集においても、内田氏・平野氏・跡上氏は評価の方向、ダルミ氏・山根は疑問を呈しており、論者によって解釈が分かれている。今回、『近代文学試論』において小特集という場を設けていただいた。本小特集は、アクチュアルな解釈の多様性を提示するとともに、同時代のテキストをリアルタイムで議論する意義を示す一試行である。